

第 1 章

ソ連邦崩壊後の 国家・民族の認識



タシケントの民族間友好を象徴する記念像。民族間友好広場に建てられたものだったが、2008年に移動された(2006年撮影)。

ソ連邦崩壊は、ウズベキスタンの人々が自国を認識する過程に大きな影響を与えた。それは、まずソ連から独立し新たに形成されるウズベキスタンという国家に対する姿勢に表れた。さらに、人々がウズベキスタンで使用される言語や多民族構造を認識する際にも影響を与えた。

I ソ連邦から独立国家としてのウズベキスタンへ

1 ソ連時代の国家認識

現代世界において、国籍は人間にとって重要なアイデンティティ単位の一つだと言えるだろう。ソ連時代、人々の多くはソ連という国家に対する帰属意識をもち、各共和国に対してはそれほど強いつながりを感じていなかった。

ソ連時代に生まれソ連の教育を受けた人であれば、誰もが「私たちの国はソビエト連邦、私たちの国の心臓はモスクワである」という言葉を学校で何度も何度も繰り返し覚えたこ

とだろつ。音楽の授業では「Shiroka strana moya rodnaya(広い我が母国)」という歌を、英語の授業では「I am a citizen of the Union of Soviet Socialist Republics(私はソビエト社会主義共和国連邦の国民だ)」というフレーズを習った。さらに、地理の授業では、「我が国の領土は世界の六分の一を占める」というのも当たり前のような答えだった。実際、人々は、自分の国を「ウズベク・ソビエト社会主義共和国」というよりは「ソビエト連邦」と認識していた。また、教育過程では、私たちの国にはホームレスや失業者がいないこと、国民全員の生活水準が比較的同じであり、極端に貧乏な人や金持ちがいないこと、人種や民族に基づき差別がないこと、自分たちの国が他の発展途上国を支援し、それらの国々の学生が留学先としてソ連を選んでいることなどを学び、人々はこれらさまざまなことについて誇りをもっていった。いずれ共産主義を達成し、すべての人が幸せになれる社会が実現することを信じ、それを目標に自らの人生を送った人が非常に多かったように思う。

世界(特に西側)から脅威と見なされた核兵器やさまざまな武器開発も、人々にとっては誇りの一部であり、「自分たちの国はいかなる国からも甘く見られない」という自信の表れだった。その誇りが人々の支えとなり、ソ連における政治・経済問題もそれほどひどいものには見えなかった。しかも、そのような考え方は、ロシア人だけでなくウズベク人や他

の非ロシア系国民ももっていた。

さらに、かつては、ソ連の赤いパスポート（国内旅券）があればソ連のどこでも訪れることができた。もちろん、パスポートには持ち主の住所、民族などが記載されていた。また、住所登録が義務づけられていたし、特定の地域に住むことを禁じるような住所登録上の制限もあった。しかし、ソ連国内の移動に関して制限はなかった。実際、さまざまな共和国に親戚がいた人も少なくなかった。そのため、人々には、どこに住もうが自分はソ連国籍の持ち主だという認識があった。

2 「ソビエト国民」形成の試みと失敗

七十年にわたるソビエト政権時代、ソ連中央政府とソ連共産党は、「ソビエト国民」という新しいアイデンティティを国民に強制しようとした。その主な目的は、まず、人々のムスリムとしての宗教的な価値観・アイデンティティや、民族的な自己認識を薄めることだった。そのうえで、「ソビエト国民」という旗のもとに人々を統合し、ソビエト的な共通の価値観や文化を生み出そうとした。確かに、当時の人々はそれほどお互いの民族性を気に

していなかった。多民族であることが当たり前の時代であり、お互いの共通言語としてロシア語が使用されていた。筆者がインタビューしたある人は、当時の時代の良さを以下のような言葉で表した。

「当時のことでもっとも記憶に残っている出来事の一つは学生同士の交流です。私はコムソモール(注2)での経験もあり、そのまま大学の教育学部に入學しました。私が入學したのはベルゴロド大学でした。私たちは学生でしたが自分たちでアルバイトをし、りしてさまざまな都市に旅をしました。ある夏にミンスク(ベラルーシの首都)に行けば、別の夏にはモスクワ、レニングラードへ行きました。私たちのグループは非常に仲が良く、さまざまな民族の人間がいました。私たちはある晩をウズベク民族の晩として祝っ

注(2) コムソモール、オクチャブリヤータとピオネールは、いずれも子供・若者のための共産主義組織で、オクチャブリヤータとピオネールはそれぞれ七〜九歳(小学生)、十〜十五歳(中学生)の子供を対象とし、コムソモール(共産主義青年同盟)に入る準備段階として位置づけられていた。

たり、別の夜をウクライナとかロシア文学の夜にしたりしました。私たちの大学の先生のお多くはサマルカンドにもタシケントにも行ったことがあり、私たちの民族に関心をもっていました。私たちは中央アジア出身だったにもかかわらず、誰も私たちに悪口を言ったりいたずらをしたりしませんでした。どこに行っても私たちは歓迎されていました。当時の雰囲気として、『お前は何人だ!?』と聞く人はおらず、お互いに尊敬の念をもって接していました。私たちの学生グループでは多くの（民族の）人が互いに結婚し、その後も交流を続けていました。」

このような多民族的な環境があると同時に、民族的なアイデンティティも認識されており、それぞれの民族が自分たちの生活、習慣や伝統を守ろうとしていた。ただ



1970年代のウズベキスタンの多民族社会。

し、人々は決して他の民族が嫌いだから自分たちの民族的な特徴を残そうとしていたわけではない。ロシア語・ロシア文化を中心とする多民族社会化がどんどん進む中で、自民族の良い部分や言語、伝統を少しでも残そうとしていたのだった。このようなロシア語・ロシア文化を中心に据えた政策（ロシア化政策）はソ連邦崩壊に至るきっかけの一つになり、各共和国における民族主義の波をも促進してしまった。それは以下の証言にも表れている。

「ソ連時代のもっとも良くないところは、やはりロシア化政策でした。みなロシア語で話させてウズベク語などロシア語以外の言語を忘れさせようとなりました。ウズベク人は（自分たちの国ウズベキスタンにいなから）後ろから『お前らは羊だ！』『文明化されていない動物だ！』と言われたこともありました。そのようなとき、私たちは口論を避けるためにも黙ってその場を離れました。ロシア化政策に反対することも反発することもできませんでした。（それは）不可能でした。なぜなら、決定的に重要なポストはすべてロシア人やロシア化を支持する人々が占めていました。私も仕事をしていましたけれど、当時の書類はすべてロシア語であり、ウズベク語の書類は誰も受け付けてくれませんでした。ロシア語がわからなければ何もできませんでした。昇進もできないし、人間とし

ての扱いさえ拒否されていきました。そのような政策の結果、私たちはロシア語を完璧に習うことができないばかりか、ウズベク語も失ってしまったのです。」

これらの相反する二つの意見は、ソ連時代における多民族共存の肯定と、ロシア化政策への反発という異なる二つの評価をそれぞれ表している。これは、いわばコインの裏表であり、いずれも真実を物語っていると言える。このような二つの感情が人々の間に生まれた理由はいくつかある。当時の制度のもとで、大学に通い、ロシア語を習得し、良い仕事に就き、共産党のメンバーだった人はロシア化政策を歓迎し、それこそが近代化だと認識していた。他方、そのような状況において、ロシア語よりもウズベク語または伝統や宗教を重視する人はロシア化政策を嫌っていた。確かに、そのような人々の間でソビエト政権の教育、医療、雇用制度を評価した人は少なくなかったが、彼らもソ連の言語・民族・文化・宗教政策については受け入れることができなかったと思われる。

また、政策に対する見方は民族的帰属によっても大きく異なる。ロシア人はソ連時代における多民族共存に対し肯定的評価をすることが比較的多い。他方、ウズベク人の間では、そのような肯定的評価とロシア化政策への反発をあわせもつ人もいれば、ソビエト政権下

で構築された社会制度をまったく評価しないばかりか、ソビエト政権が作り上げた何もかもを嫌う人もいただろう。これも当時に関する人々の複雑な思いを表している。

私が初めて民族という概念に直面したのは幼稚園（一九七九年頃）だった。ソ連の多民族政策の影響もあり、その幼稚園にはウズベク人、アルメニア人、アゼルバイジャン人、ロシア人、ウクライナ人など、民族と外見がそれぞれ異なる子供たちがいた。民族を理由とした差別もなければ、子供たちにはその認識すらなかった。しかしある日、ゲームの中で私は他の子供から「あなたはロシア人？」と聞かれ、答えに困った。「ロシア人って何だろう」と思ったのだ。周りの大半の子供たちが「自分はロシア人だよ」と言ったので、「じゃあボクもロシア人だね」と答えた。そのときの私にとって自分が何民族かということはどうでもよく、一番重要なのは友達と仲良く遊べることだった。その日家に帰って親に聞いてみたところ、初めて民族ということの説明され自分はウズベク人であることがわかった。

ソ連時代、子供は自分が何民族でどのような文化や伝統の持ち主であるかを認識していなかった。多民族社会建設という政策のもとで、事実上のロシア化政策がどんどん進められていた。そのような政策は人々の不快感を招き、ペレストロイカに伴う混乱の時期には人々の不満が噴出した。それがソ連邦崩壊を加速し、人々がそれを受け入れる大きな理由

になった。

ソ連時代の政策の特徴とその日常的な効果は以下のような言葉に表れている。

「私たちが住んでいた街区の通りの多くには、私たちがあまり知らないロシア人やウクライナ人の名前がつけられていました。例えば、シェフチェンコ通り、ゴーゴリ通りなどです。これらの名前は住んでいる人たちから見れば（愛着やつながりという面で）何の意味もありません。これらの人物のことはよく知られていないのです。百歩譲って、これらの人物を知っていたとしても、それらの通りにどつという関係があるのかを考えれば、彼らの名前をつけるのはやはりおかしいと思います。これは当時のソビエト政権とウズベク・ソビエト社会主義共和国のあり方を象徴するものです。当時は、ロシア人の参加なしに、ウズベク人のみで何かを決めることは禁じられていました。例えば、共産党の第一書記がウズベク人であれば第二書記は必ずロシア人などの非ウズベク人でした。ウズベク・フィルムの製作においても、ウズベク人がウズベク語の映画を作っている、ロシア人を製作者として入れないと映画製作の許可は出ませんでした。これらは一例にすぎず、あらゆる分野でこのような状況がありました。」

結局、ソ連によって強制されたソビエト人というアイデンティティ政策は逆効果を招き、民族の絆がより強くなる結果に至った。ソ連邦解体のとき、民族主義者や各共和国のリーダーはそれを利用した。また、独立前後に見られた経済低迷に伴う社会の分裂と民族衝突が民族間関係の悪化につながり、民族に基づくアイデンティティをさらに強固にした。その結果、各民族は互いの利益追求が矛盾すると認識し、互いを競争相手と見るようになった。しかし、このような認識は根本的な部分で誤りがあった。なぜなら、同じ地域に住む諸民族の利益追求や最終的目標は必ずしも矛盾するわけではなく、むしろ互いを補完し合うものと考えられるからだ。

Ⅱ ソ連邦崩壊後の国家建設と多民族社会

1 新国家建設と多民族社会

ソ連邦崩壊直後、ウズベキスタン政府は、共和国在住希望者には、民族、宗教などにか

かわらずすべての人にウズベキスタン国籍を与えた。政府は、多民族国家を形成していくために、希望者全員に国籍を与えることによつて国民統合をはかり、ウズベキスタン人というアイデンティティの共有を目指したのである。しかし、新しく作られた国で、「自分の国はウズベキスタンで、自分はウズベキスタン人だ」という考え方はなじみにくかった。このことはウズベキスタンの多民族構造と密接に関連している。

ウズベキスタン社会は、ソ連邦崩壊後の他の中央アジア諸国と同様、多民族構造を保っている。ウズベキスタンではウズベク人が多数を占めるが、都市部ではロシア人、タジク人など非ウズベク人も数多く住んでいる。なおウズベク人は、ウズベキスタン以外の中央アジア諸国にも多数暮らしており、地域全体で見ても群を抜く最大の民族集団である。

ウズベキスタンの諸民族は、この地域に居住するに至つた経緯によつて二つに大別される。第一は、この地域に歴史的に住むトルコ系の民族（カザフ人、キルギス人、トルクメン人、ウズベク人）と、イラン系の民族（タジク人、パミール人など）である。第二は、ロシア革命や第二次世界大戦、さまざまな出来事（大地震後の復興のためなど）、またはソ連の民族政策の影響で、中央アジア以外の地域から移り住んだ、あるいは強制的に移住させられた民族である（例えば、ロシア人、ウクライナ人、アルメニア人、グルジア人、朝鮮人など）。こ

のグループの民族は、日常生活ではロシア語を使用し、文化的にもロシアに近いため、しばしば「中央アジアのヨーロッパ人」と呼ばれてきた。アジア人の顔をもつ朝鮮人も、日常生活ではロシア語を使い、生活習慣がロシア人に似ていたことから、ロシア人と同じ扱いを受けてきた。

このような民族構造がある中、人々にとって、ソ連邦崩壊後の新たな状況に慣れるうえで大きな壁になったのは、やはり主要民族を中心に据えた国家建設に対する少数民族の違和感だった。その背景には、これまで（ロシア人中心に形成されてきた）多民族社会が重視されてきた歴史だけではなく、民族相互間の誤解に基づいたイメージがあった。

2 民族間の相互イメージ

ウズベキスタンに住む諸民族が互いに抱くイメージはさまざままで、その表し方にも独自性がある。それぞれの民族を特定の動物に例えるのはその一例である。多くの場合、ウズベク人は集団で行動することが多く、大家族での生活を好むことから羊に例えられる。また、ウズベク人は個々人の判断で行動するよりも他人の意見や大多数の意思を尊重するこ

とから、他の民族（特にロシア人）から羊のようだと批判されてきた。さらに、ウズベク人に黒髪の人が多いことも羊を連想させるらしい。他方、ウズベク人はロシア人をブタに例える。ロシア人は住まいの建設やその維持にウズベク人ほどの時間と労力をかけず、また、ウオツカを飲み過ぎて暴れたり、酔って転んだまま寝てしまったりするかららしい。ロシア人の肌の色が（ウズベク人や他の中央アジアの民族に比べて）白いことも、そのイメージに合っている。

民族間の相互イメージはまた、それぞれの民族の特徴を強調する。例えば、ウズベク人の間では昔から商人が多かったため、商売に非常に長けていると見られがちだ。しかし、それと同時に、カネにつるさく信頼できない、とも批判される。またウズベク人は人間関係を重視し、あらゆる問題を人的ネットワークをとおして解決しようとする点が強調される。

一方、ウズベク人はカザフ人のことを怠け者と見なしている。あるエピソードを紹介しよう。ウズベク人の運転手とウズベキスタンからカザフスタンへ行ったとき、突然、運転手が「私は国境警備所や地図よりも道路沿いの土地を参考にするよ」と言った。どうということかと聞くと、彼は、「ウズベキスタンからカザフスタンに向かう場合、国境までの土地はみな何かの栽培に使われていて、きれいに耕されている。それがカザフスタンに入る

やいなや、何のために使われているのかわからない、ただっぴろい土地が広がるんだ」と答えた。彼はこの言葉で両民族の特徴を表そうとしたのだろう。同じく、労働に関する特徴で言うと、ロシア人は個人主義的で家族を優先しないが仕事はできる、というイメージがある。実際、電気関係、鍵屋、その他の職人にはロシア人が多い。他方、彼らはウオツカを飲み過ぎるから仕事を頼めない、信頼できないという印象をもっている人も少なくない。

ロシア人と対照的な例はユダヤ人だ。ユダヤ人は非常に賢いが、力仕事が大嫌いで他人をつまく利用すると考えられている。実際、肉体労働をするユダヤ人はそれほど多くなく、医師や大学教授などが比較的多い。また、彼らの結束の固さはしばしば羨望の的となる。ウズベキスタンでユダヤ人が差別されることはまずないが、他民族とははっきりと区別される。ユダヤ人についての小話もたくさんある。ここで一つ紹介しよう。

貧乏なユダヤ人が生活に困っていたので、隣のウズベク人が彼を助けようとした。

ウズベク人……「その土地を耕して種を蒔ける状態にしてくれたら賃金を支払うよ」

ユダヤ人……「わかった。全自動のシヨベルをくれ！」

ウズベク人……「そんなものがあるわけじゃないじゃないか」

ユダヤ人……「それと同じさ。畑仕事をするユダヤ人なんていないよ」

ウズベク人とタジク人は、言語こそ異なるが、生活スタイル、慣習、行動様式に多くの共通点があり、「二つの言語によって分けられた同一の民族」と呼ばれることもある。また、カザフ人とキルギス人は、言語や慣習、文化の面で非常に似ており、両民族は互いを近い存在と感じている。

以上のような民族間の相互イメージは一般化に基づいたものであり、現実にはあてはまらないことも少なくない。しかも、他民族のイメージ、ステレオタイプや偏見は目に見えないため、観察・分析することは通常難しいが、それがはっきりした形で表れるのは子供の結婚相手を選ぶときだ。もっとも望まれるのは同じ民族の結婚相手である。なぜなら、ウズベキスタンにおいて結婚とは単に二人の若者が新たな家庭を築くのではなく、彼らの家族同士のつながりを意味するからだ。そのため、人々にとつては、どのような人と親戚になるかが非常に重要なポイントになってくる。また、それぞれの民族は昔から多くの儀礼をとおして民族の伝統を維持してきた。その継承を考え、結婚相手を選ぶ際に同じ価値観や伝統を共有する相手を選ぶことも珍しくない。さらに、結婚においては宗教が重要な

要素となる。一般的に、イスラーム教徒（ウズベク人や他の中央アジア系民族）は（ロシア人のような）キリスト教徒あるいは無宗教の人とは結婚したがるらない。

仮に、結婚相手と同じ民族でなければ、少なくとも文化・宗教的に近い民族の人を好む傾向がある。例えば、ウズベク人にとってはウズベク人との結婚がもっとも望ましいが、タジク人との結婚に対しては伝統や習慣の近さからそれほど抵抗が強くない。その次はカザフ人やキルギス人だが、これらの民族との宗教的、文化的な違いを恐れ、結婚を望まない人も少なくない。ウズベク人は非中央アジア系民族であるロシア人、ウクライナ人、ベラルーシ人などとは結婚を望まないし、彼らも一般的にウズベク人や他の中央アジア系民族との結婚を好まない。その理由として、ウズベク人をはじめとする中央アジア系民族は拡大家族を大事にし、可能な限りまとまって生活することが多い。同じ家に住まなくても、同じ地域、都市に住み、さまざまな機会に互いを訪問し合い、つながりを強めようとする。そのようなつながりには独自の論理、モラルやルールがあり、個人主義を重視するロシア人などはそのような生活を嫌う。一方で、中央アジア系民族もロシア人のような個人主義的な生活を嫌うので、考え方が一致しない。

ただし、このような原則があったとはいえ、現在に比べると、ソ連時代にはウズベク人

とロシア人など異民族間の結婚が多かった。ソビエト国民という概念が尊重されていたし、共産党などで出世する際に異民族との結婚が有利な場合もあったからだ。それでも、考え方の不一致や親戚からの干渉などによって失敗した例が多い。例えば、ある人が自分の家族を例にして次のような話をしてくれた。

「私の兄は一九五〇年代に反政府活動の罪でイルクーツクに送られ刑務所に入りました。彼は十年以上服役し、イルクーツクでロシア人女性と結婚して戻ってきました。彼が戻ってきたとき、私の親戚はロシア人女性を受け入れてくれませんでした。最終的に、彼女はどのような扱いを受けてもよいから彼と一緒に住まわせてほしいと頼んできたのですが、やはり彼女はロシア人だからということを受け入れてもらえませんでした。最終的に、兄はウズベク人と結婚させられました。」

仮にロシア人とウズベク人の間の結婚がうまくいっても、そのような家族に生まれた子供が大人になったとき結婚で困る例が少なくない。彼らは中途半端な立場に立たされ、いずれからも完全には受け入れられないのである。

中央アジア系民族とスラブ系民族との中間的な立場にあるのはタタール人である。タタール人は同じイスラーム教徒でありながら生活スタイルや考え方ではロシア人に近い側面ももっている。そういう意味では、ロシア人とタタール人の結婚は少なくないうえ、そのような結婚に関してロシア人はそれほど抵抗感をもたない。対照的に、ウズベク人はタタール人との結婚を望まない。多くの場合、タタール人は計算高いと思われるからだ。これも一般化されたイメージで深い根拠はないのだが、このようなイメージから、ウズベク人にとってタタール人との結婚はロシア人との結婚よりも低く位置づけられている。興味深い点として、新郎がタタール人、新婦がウズベク人という組み合わせはまだ許容範囲内と見なされる一方、新婦がタタール人、新郎がウズベク人というのはウズベク人から見ると最悪の組み合わせである。多くの場合、タタール人女性は可愛いけれども非常に気が強く、家庭内で主導権をもとうとすると思われる。タタール人との結婚に対するウズベク人の抵抗感の強さが表れる例として、たとえ結婚相手の親がタタール人でなくとも、相手の親戚にタタール人がいるかどうかを調べる人もいる。特に、結婚相手の肌が白く、顔立ちも一般的なウズベク人と異なると、タタール人との親戚関係が疑われる。ただし、日常生活ではタタール人に対する敵対的な姿勢や差別はない。タタール語とウズベク語が

似ていることから、多くのタタール人はウズベク語も堪能である。

Ⅲ 言語と人々のアイデンティティ

1 変わりゆくロシア語の地位

ウズベキスタン憲法(第四条)によると、ウズベキスタンの国語はウズベク語のみである。その適用(公的機関における使用義務化)は十年間(一 五年まで)の猶予期間を盛り込んでいたが、二 五年になっても実行が難しく、その期間はさらに延長された。一方、公用語として認められていないものの、ロシア語はいまなお広く使用されている。

多くの人にとってロシア語は単なる一つの外国語ではなく、自分たちのアイデンティティや伝統を脅かしてきた異民族の言語である。独立直後はロシア語離れが進んだが、これは人々の反ロシア的な考え方の反映というよりも、アイデンティティの再確認を意味していたと言える。

また、時間が経つとともに、ウズベキスタンの人々はロシア語をかつての「宗主国」の言語ではなく、国際的な言語として受けとめるようになった。ロシア語の知識は将来役に立つため、子供の教育上非常に重要であると考えられるようになった。特に近年、政府の脱ロシア語政策とは反比例するかのようになり、国民の多くはロシア語教育を重視している。人々は子供が小さいころから、自分の民族の言語とロシア語の双方をマスターすることを望んでいる。

そもそも、ソ連時代から現在に至るまで、ウズベキスタンに限らず中央アジアでは現地語で教える学校の教育レベルがロシア語学校よりも低いと言われており、このことも多くの親が子供をロシア語学校に入学させる要因の一つになっている。ソ連時代、現地語学校の教員の多くは現地人が大半だった。ロシアや他の共和国で教育を受け



この写真のように、1970年代のウズベキスタンではさまざまなスローガンやサインはロシア語とウズベク語で同時に表示されていた（ヒヴァ市）。

た教員は現地語の学校よりもロシア語学校に就職する人が多く、結果としてロシア語学校では教員の知識レベルも教育レベルも上がった。一方、現地語学校では教員の専門性向上にそれほど注意が払われてこなかったこともあり、教育レベルはあまり向上しなかった。さらに、ウズベク語学校の教育方針はしばしば保守的で、先生の言うことを聞くことが重視されたが、ロシア語学校では生徒が自分の意見を述べるのが奨励されていた。

私たちの中学校時代の担任はまさにそのような人だった。彼女は五十歳代のロシア人女性で、三十年を超える共産党員歴をもっていた。彼女は、レーニンの「学べ、学べ、もっと学べ！」という言葉が口癖だったが、その裏にあったのは共産党の教義やイデオロギーではなく、教育に対する信念だった。彼女はいつも全員のノートを添削し、放課後も教室に残って成績が良くない生徒を指導していた。さらに、問題のある生徒の家庭訪問にも熱心だった。ある生徒は成績が芳しくないだけでなく、クラスでの行動も問題視されていて、一週間以上学校を休んでいた。彼女はその生徒の家に行き、何軒もの家の屋根を渡って逃げようとした生徒を学校につれ戻したという伝説の持ち主だった。

ウズベク人である筆者はロシア語で教える学校に通い、ロシア語を外国語として学んだのだが、休憩時間に友人たちとウズベク語で話すと、彼女はとても怒っていた。私たちは

その理由を理解できなかったが、彼女はいつも、「あなたたちが自分たちの言語で話すのは結構なことだけれど、やはりロシア語を完璧にマスターするには、たとえそれが友人同士の会話でも学校内ではロシア語にしないとイケませんよ」と説教していた。読者は、これをロシア語教育を通じた同化政策の一環だと思われるかもしれない。しかし、今思えば、それは彼女が私たちの言語教育に真剣だったことの表れだった。当時はロシア語をマスターしなければ良いキャリアは望めなかった。両親は、自分の子供をロシア語学校に通わせるか、ウズベク語の学校に通わせるかを選択することができたが、ロシア語の学校を選ぶ人の多くは子供の将来を考えてそのような選択をしていた。

こうしたことから、ロシア語学校の数は減っているにもかかわらず、現在でも、ロシア語という外国語での教育の利点と、ロシア語学校の教育レベルの高さから、自分の子供をロシア語学校に通わせたいと考える人は非常に多い。

2 ロシア化された人々 「ルシー」

ロシア語の社会的地位と関連するもう一つの要因は、民族的には非ロシア人でありなが

らロシア語を母語とする人々の存在である。彼らは自分の民族の言語をまったく話すことができないか、日常会話は話せても専門的な話や読み書きはできない。彼らの名前も顔立ちも非ロシア的なものだが、言語だけでなく、行動パターン、メンタリテイや価値観もかなりロシア化されている。ウズベク語ではそのような人たちをソ連時代から「ルシー」と呼んできた。そのような人はウズベキスタンよりもカザフスタンとキルギスに多い。彼らはロシア語を家庭内でも仕事場でも使っており、現地語の全面導入やローマ字表記に反対している。その理由として、彼らはロシア語が世界的な言語だと考えており、現地語の導入によってその知識レベルが低下することへの恐れがあると考えられるが、単純に現地語を勉強したくないから、もしくは現地語に対して優越感をもっている人も少なくない。

3 外国との関係とロシア語の地位の変容

ロシア語以外の外国語の地位の変化も、ウズベキスタン社会におけるロシア語の地位を左右する要因である。独立後、英語を習得すれば留学や就労の機会が拡大する傾向が強まったため、ロシア語よりも英語の知識を重視する人が増えつつある。そのことから、ロシ

ア語教育の時間数や科目数が減る一方、英語などの外国語の時間数や科目数が増えつつある。

ただし、いまだ英語を話せる人は非常に少ない。二 五年の調査では、中央アジア全体でロシア語を話す人の割合は八 %を超えた。一方、「あなたは英語がどれくらいできますか」という質問に対し、「堪能」と答えた人の割合は、もっとも多かったウズベキスタンでも一・八%で、カザフスタンでは一・一%、キルギスでは一・八%、そしてタジキスタンとトルクメニスタンでは一・四%だった。圧倒的多数は自分が英語ができるとは思っていないのである(表3)。

ウズベキスタンをはじめとする中央アジアにおけるロシア語の影響力は、国民の対ロシア感

表3 あなたは英語がどれくらいできますか

(%)

	ウズベキ スタン	カザフ スタン	キルギス	タジキ スタン	トルクメ ニスタン
堪能	1.8	1.1	0.8	0.4	0.4
何とか話す	7.1	2.5	3.3	2.0	1.6
少ししか話さない	30.4	16.4	18.8	21.9	18.9
まったく話さない	60.5	79.5	77.3	75.1	79.1

(注) サンプル：800人、対面インタビュー方式。

(出所) アジアバロメーター調査(2005年)

情にも左右される。二 五年の調査によると、「以下の国はあなたの国にどのような影響を与えていると思いますか」という質問に対し、(トルクメニスタンを除く)ほとんどの中央アジア諸国で、ロシアの役割を「良い」「比較的良い」と回答した人が半数を超えた。ロシアは中央アジア諸国でもっとも肯定的な評価を得ているのである。このようなロシアのイメージは、ロシア語の使用の機会が減るなか、中央アジア諸国の国民が中央アジアにおけるロシアの特別な役割を認めていることを示している。現段階では、たとえ政府がロシア語の使用やロシア語教育を削減したとしても、中央アジア諸国の人々は自分たちのアイデンティティや言語、伝統などが脅かされない限り、ロシア語に対しておおむね肯定的な見解をもっていると言えるだろう。

4 ウズベク語の表記の変容

ウズベキスタンでは、一九九五年の国家言語法でウズベク語の表記をキリル文字からローマ字に転換することが定められた。その完全な適用は十年後の二 五年とされたが、完全な適用に問題が多く、その移行はいまだに完了していない。実際、文字表記の移行は

容易ではない。一九九〇年代前半に小学校に通いはじめた子供の多くは、ウズベク語のローマ字表記とキリル字表記を同時に勉強したため、ローマ字表記にある程度慣れているが、三十代以上の人はローマ字表記の読み書きに苦労している。ローマ字で書かれた言葉を何度か読み返し、やっと意味がわかる人も少なくない。

実は、ウズベキスタンの場合、このような文字表記の転換は二十世紀だけでも今回で三度目である（一九二九年にアラビア文字からローマ字表記に、一九四〇年にはキリル字表記に転換）。年長者の間では、一九四〇年にキリル文字が導入された際の苦労話をする人が少なくない。ある人は、「自分が小学校のとき、祖母はキリル文字が読めず、新聞や書類が届くと代わりに読むよう私に頼んだ。今度は私たちがローマ字を読めないのです、孫に読んでもらわないといけない」と語っている。またローマ字表記の導入により、ソ連時代にキリル文字で印刷された本や資料を若い世代は使いにくくなった。多くの場合、ソ連時代の本や資料はロシア語もしくはキリル文字のウズベク語で書かれており、ロシア語離れとウズベク語表記のローマ字化はこれらの使用を困難にしまった。さらに、ローマ字で書かれた教科書も不足しており、ローマ字表記を普及させるうえで問題になっている。

ローマ字表記への転換は、単なる文字の転換を意味するわけではない。キリル字表記か

らローマ字表記への転換は、ウズベキスタン独自のアイデンティティを強調する政府の意図をも示しているのである。

ウズベキスタンにおいて、独立後の言語政策にはいくつかの課題が存在する。なかでも、根本的な課題は、国がどのような社会を作っていくかとしているのかということだ。これはウズベキスタンのあるべき社会構造を模索するうえで重要な課題である。つまり、ウズベキスタンが一つの民族集団を中心に形成される国家建設を望むのか、多民族国家を作るのかを選ばなければならない。その際、言語は中心的なキーワードとなる。ウズベキスタンが前者に取り組むのであれば、言語政策は主要な民族を中心に形成されるだろう。多民族国家をモデルとするのであれば、言語政策は中央アジアの多民族性を受け入れた国づくりに沿う必要がある。ロシア語の地位やローマ字表記の問題も、このジレンマの解決によって方向性が決まっていくと考えられる。